

**鹿狼山（かろうさん）と
手長明神（てながみょうじん）**

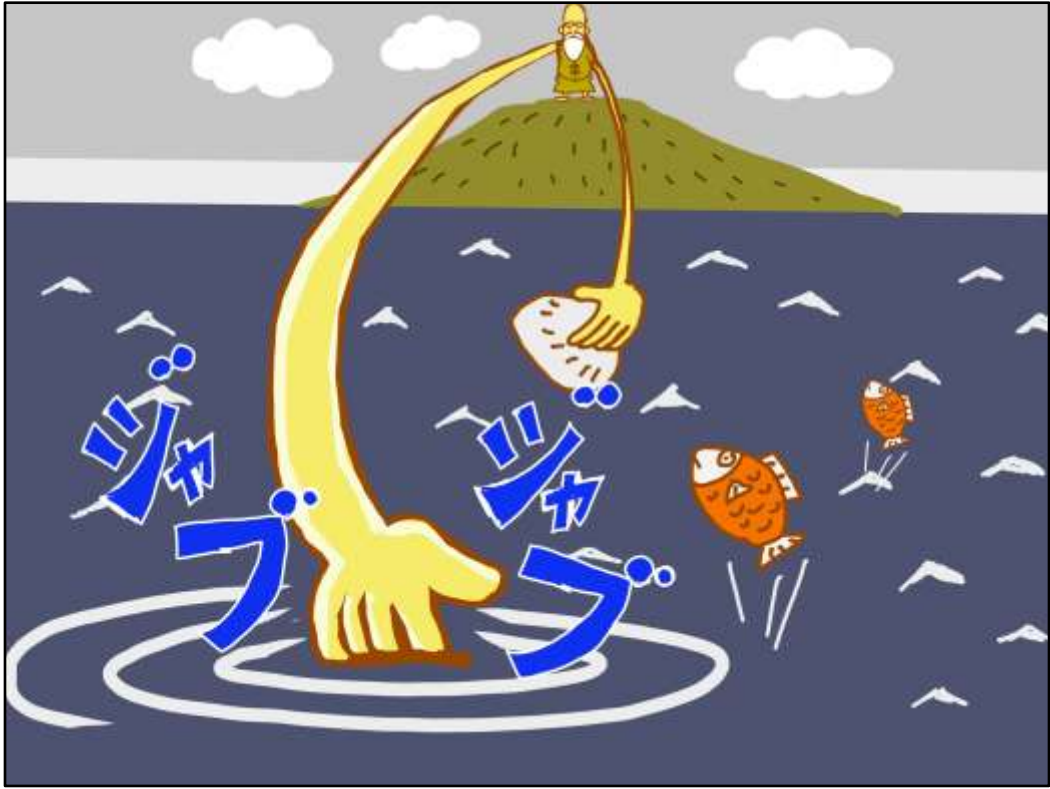




むかしむかし、ずっとむかしのことだあ。
新地町にある山になあ、手の長ーい神様が住んでおったとお。
そしてその神様はなあ、白い狼と年とった鹿をいつもそばにおいてかわいがってな
あ、暮らしとったあ。



あるときなあ、その山のとっぺんさ、その手の長い神様がなあ、またがって四方を眺めて暮らしとったっけなあ。
腹が減ったもんだから、なにが食うものがないがと思って見渡したところ、ずーっと見渡したら東の方に、大きな大きな海が見えた。



「あー、あそこになにがあっかもしんねえ」と思ってなあ、その山のとっぺんから長い長い手をのばして、海にガーっと手をかきまぜたところ、貝がいっぱいああったと。



あさり、はまぐり、ほっき貝、いろいろ貝があったもんだからなあ、それを長い手で取って、食べてなあ、殻は堅いから、途中の畑さポーンと捨ててなあ、また貝を採って食っては、また殻をポーンと捨ててなあ。長い長い年月、そして貝を食べて暮らしておったとお。



それがなあ、山と海とのちょうど真ん中ころに貝殻がなあ、山と積もってしまって、そこが今に残っている小川の貝塚としてなあ、国の史跡文化財として残されているのです。



それでなあ、その手の長い神様は、この史跡のそばにお宮を建ててな、祀られてあったんです。手長明神として祀られてあったけれども、長い間にはそのお宮も朽ち果ててな、森だけが今は残されて、その手長の神様はなあ、別の神社に祀られております。



そしてなあ、その神様がまたがって暮らしておった山は、鹿と狼の山と書いてなあ、
鹿狼山と呼ばれるようになったというお話です。
おしまい。